薬育および薬の適正使用に関するアンケート調査（結果）

１、はじめに：

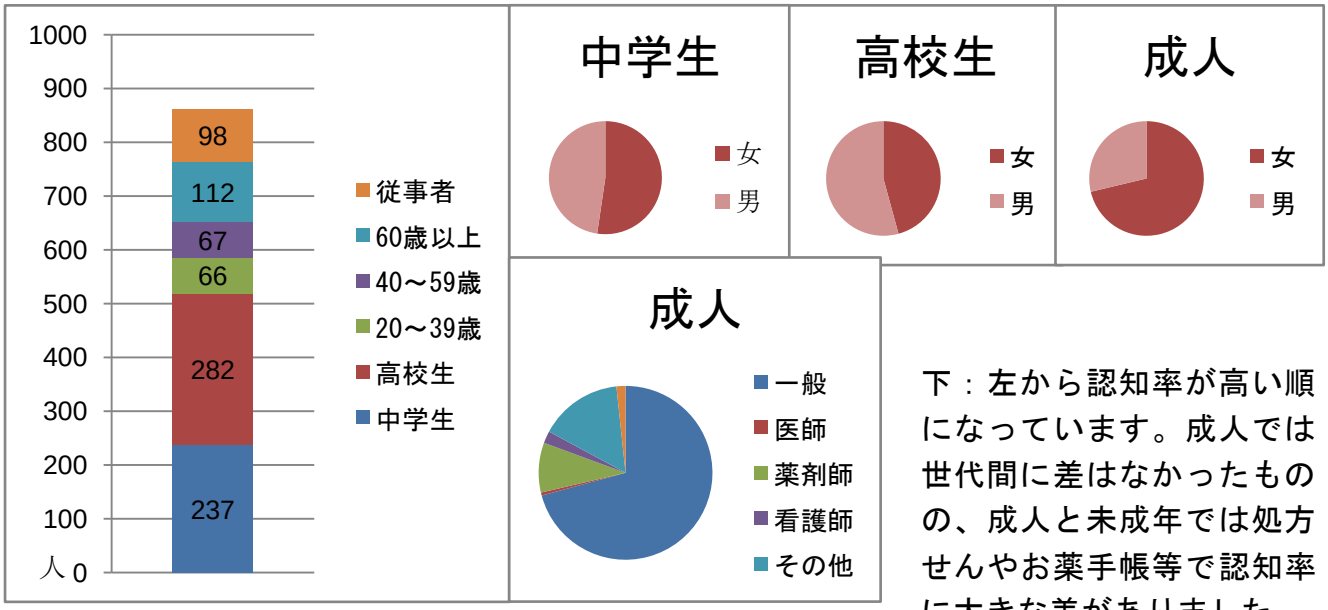
近年、医薬分業の推進や身近なﾄﾞﾗｯｸﾞｽﾄｱなど、患者自らの意志により医薬品を選択し決定する方向へと移行しています。しかしそれに伴い、間違った使用方法による健康被害も起こっています。今回、薬に関する地域の理解度及び傾向の実態を調査し、今後の教育啓発活動の参考とするため、本アンケートを実施しました。

２、実施方法：

平成２２年１１月～平成２３年１月の期間において、佐伯管内の中学生以上、計約８８０名に対しアンケートによる調査を実施しました。中学、高校生と成人では立場の違い等を考慮したため設問内容が若干異なっており、中高生は設問数３５問、成人は５８問となっております。また、成人は医療従事者を分けて集計し、特に断りがない成人表記は医療従事者を除いた一般成人となっています。

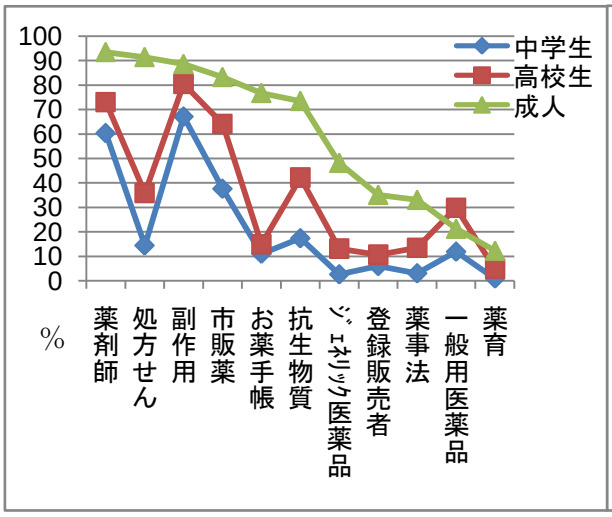
３、結果概要：

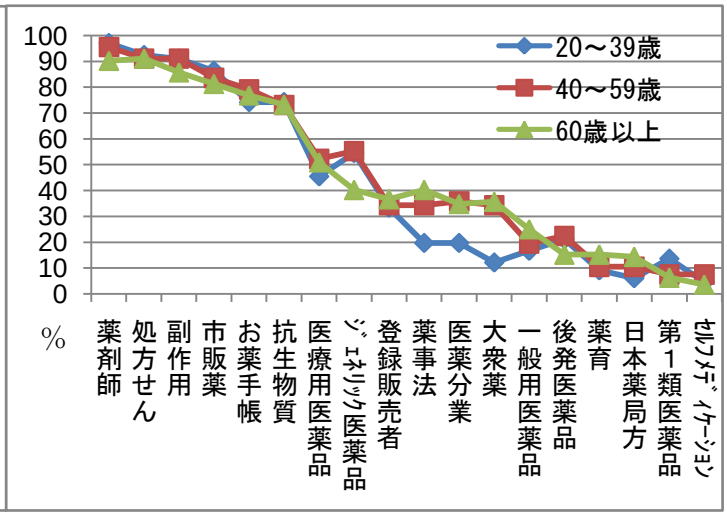
回答者構成



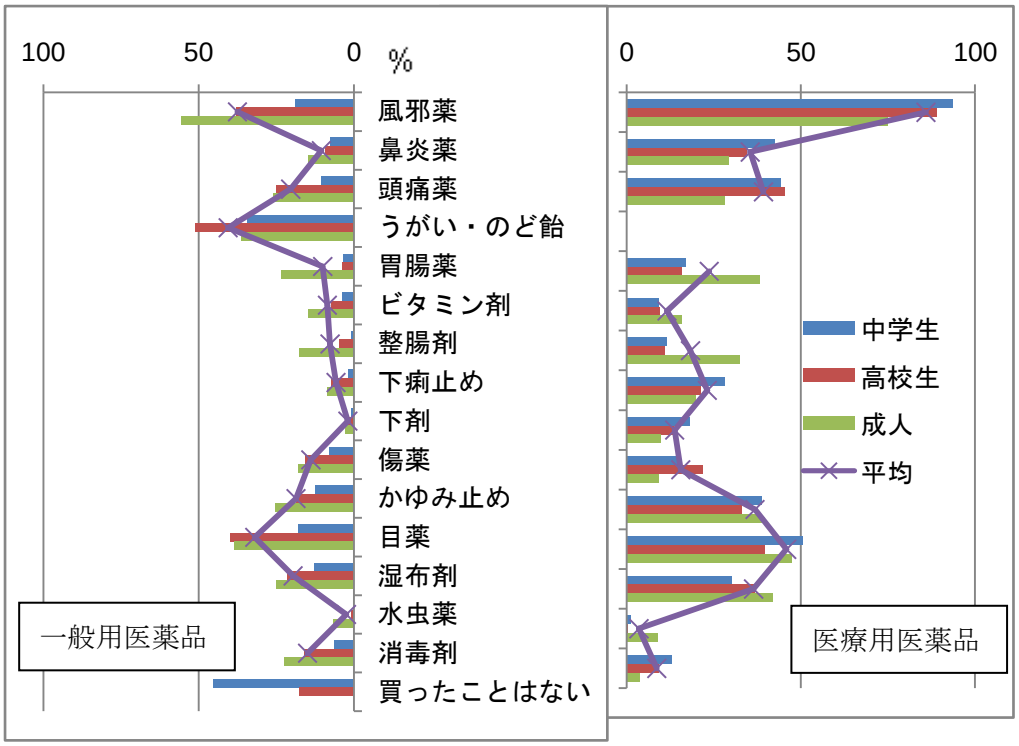
下：左から認知率が高い順になっています。成人では世代間に差はなかったものの、成人と未成年では処方せんやお薬手帳等で認知率に大きな差がありました。

医薬品関連の用語の認知率（設問１～１８）：



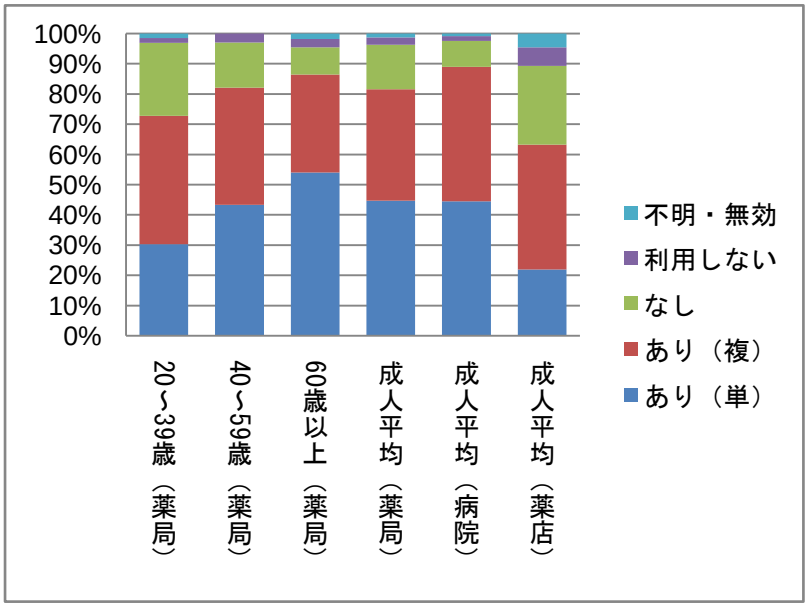


医薬品の購入経験（設問１９、２７）：



医療用医薬品、一般用医薬品（市販薬）ともに幅広く利用されています。また中学生においても、約半数は自ら購入したことは無いと回答したものの、多くの種類の薬について購入経験がありました。

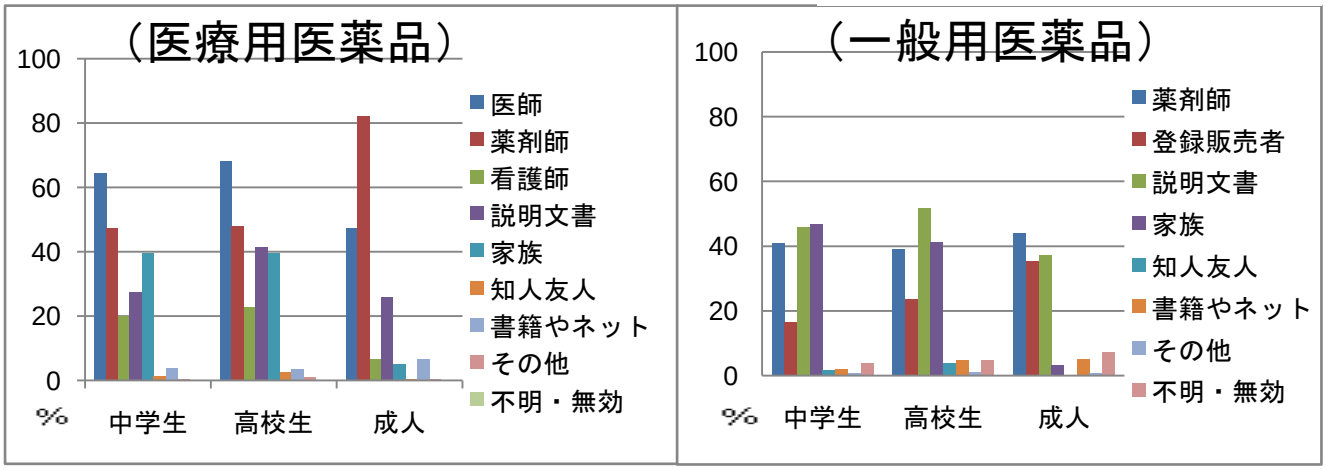
かかりつけ薬局等（設問２０、２１、２８）：



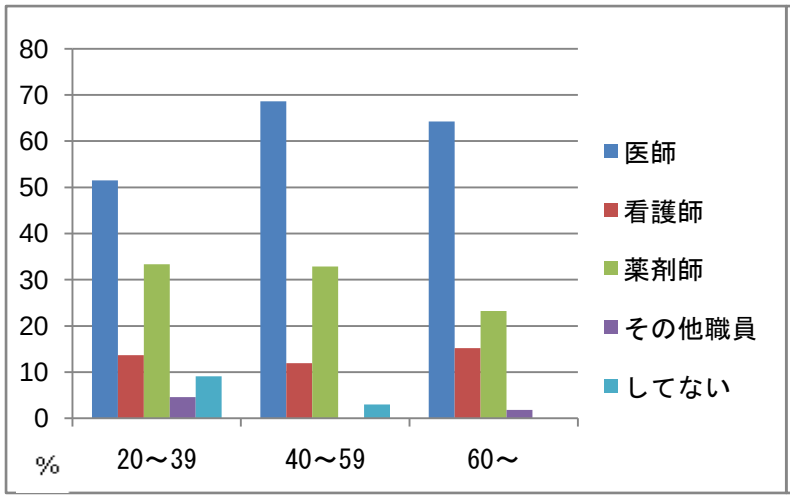
左：かかりつけ薬局を持っている一般成人の割合は年齢が上がるほど多くなりますが、かかりつけ薬局が一ヶ所ではなく、複数持っている方もかなりの割合いらっしゃることがわかりました。

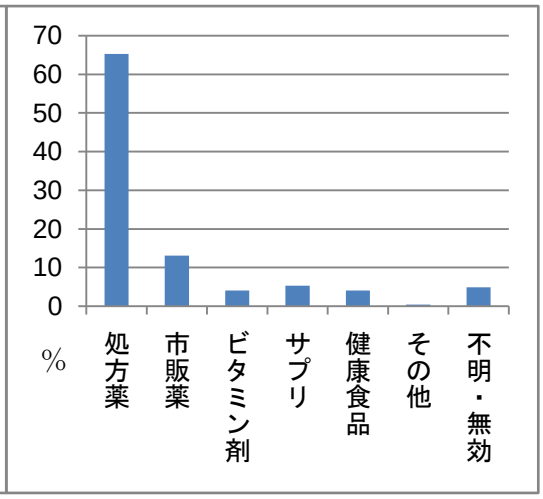
下：薬の情報は医療用医薬品では医師・薬剤師から入手している方の割合が最も多く、一般用医薬品では薬剤師・登録販売者・説明文書が多くなりました。また未成年では家族からの割合も４割を超えました。

薬の情報入手先（設問２２、２３、２９）：



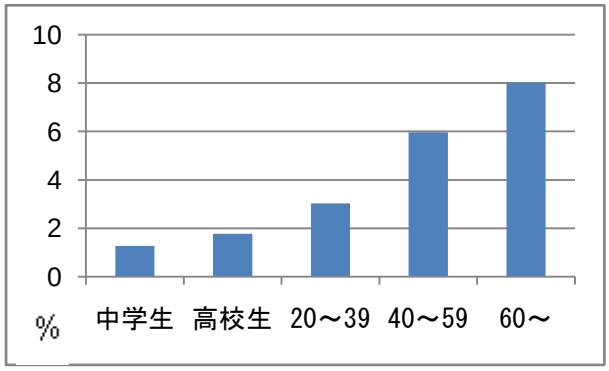
薬の情報提供先（設問２４、２５）：





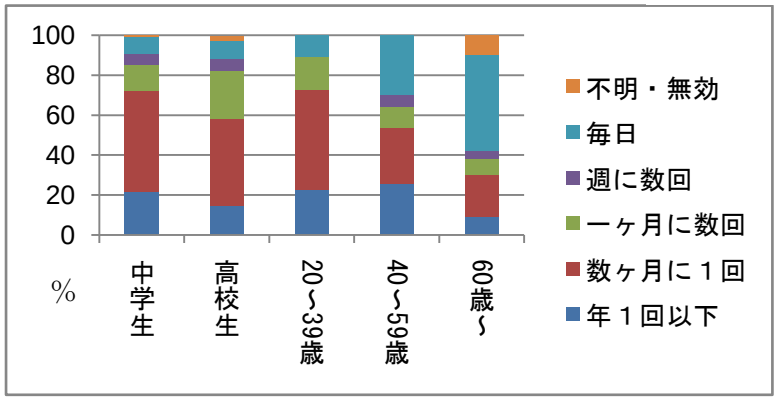
上：薬の情報提供先は医師が最も多く、次いで薬剤師となりました。また、その内訳を複数選択形式でたずねたところ、処方薬は情報提供するものの、市販薬や健康食品などは情報提供率が低い結果となりました。

薬の通信・郵便販売利用経験（設問３０）：



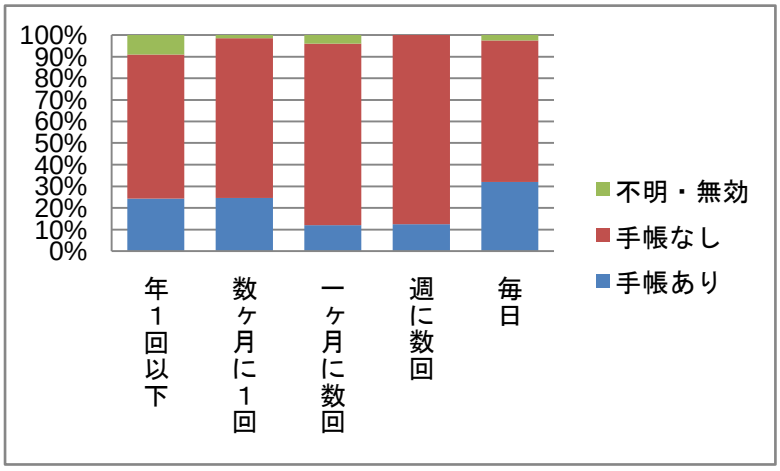
左：インターネットやカタログ等を利用した通信販売、郵便販売の利用者の割合は年齢が上がるほど高くなりましたが、６０歳以上でも８％止まりでした。

薬の使用頻度（設問３１）：



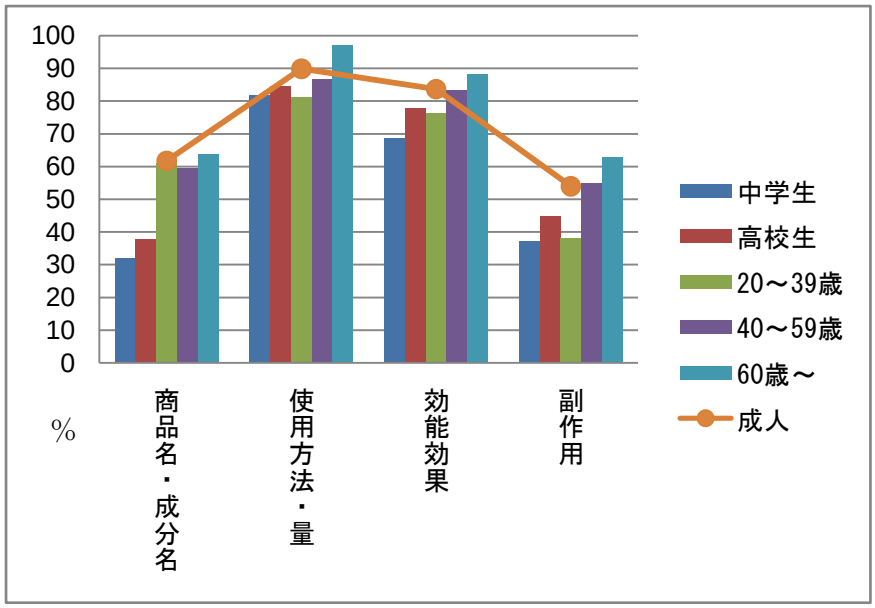
年齢が高くなるほど薬の使用率も上がりますが、中学生においても毎日使用していると回答した方が１割近くにのぼりました。また、年に１回以下と回答した方の割合も各世代とも２割台以下となり、８割の方は何かしらの薬のお世話になっていました。

薬の使用頻度とお薬手帳利用の関係（設問２６、３１）



薬の使用頻度とお薬手帳の利用率には相関が無く、一般成人の手帳の利用率は３割台以下となりました。用語の調査ではお薬手帳の認知率は成人で７５％程度であり、知ってはいるが使っていない方も多いことがわかりました。

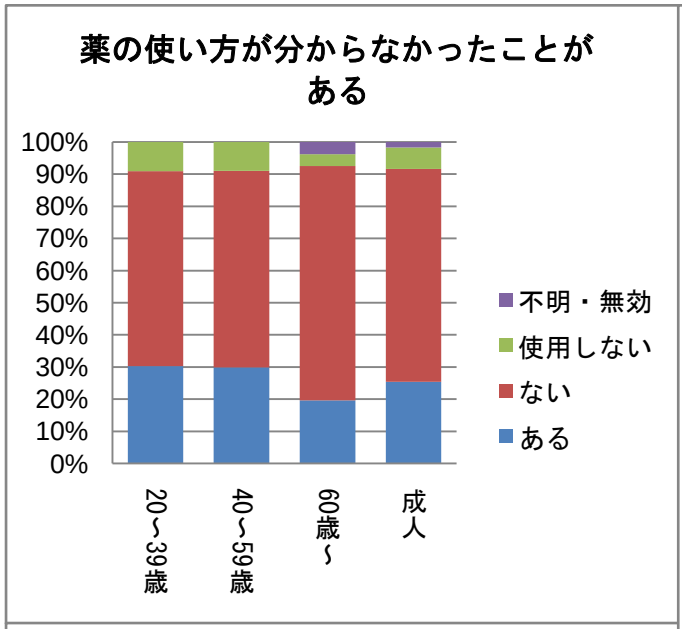
使用している薬の知識（設問３２～３５）：

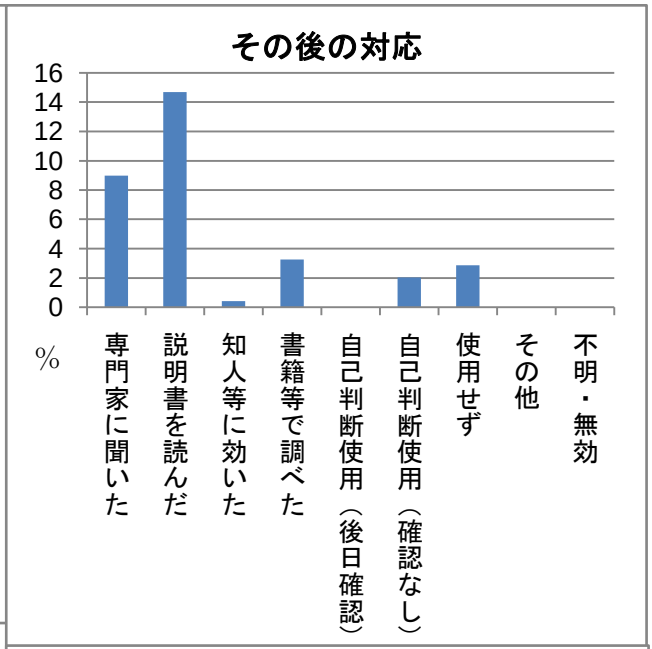


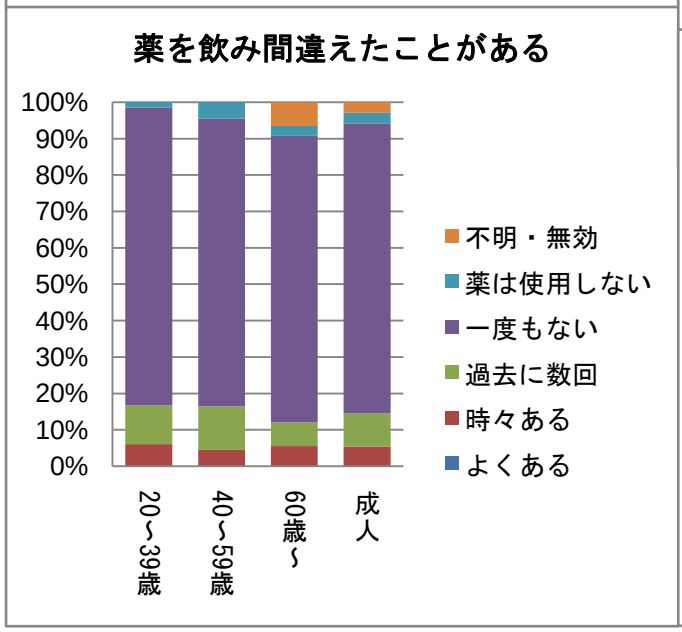
左：薬を使用している方のうち、使用方法や効能効果については知っているものの、名称や副作用については認知率が低い傾向となりました。

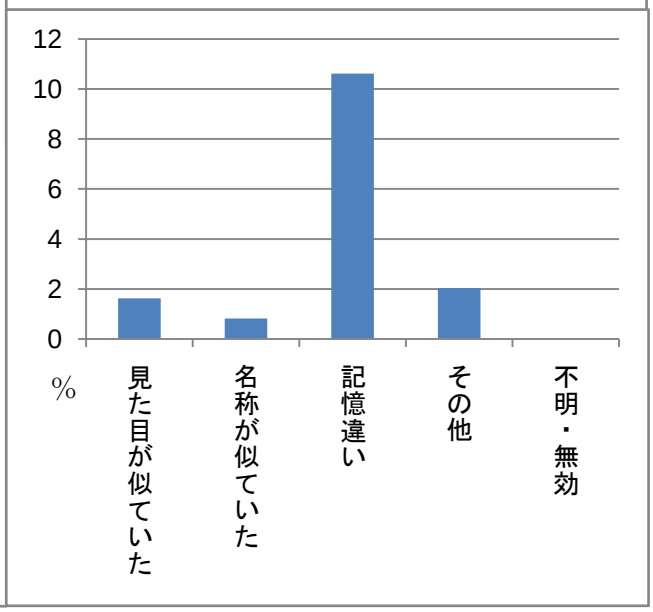
下：使い方が分からなかった経験がある方は２～３割で、吸入薬など使い方が難しいものや用法用量内容などがありました。
薬の飲み間違いは記憶違い、勘違いに起因する場合がほとんどでした。

使用中のトラブル（設問３８、３９）：

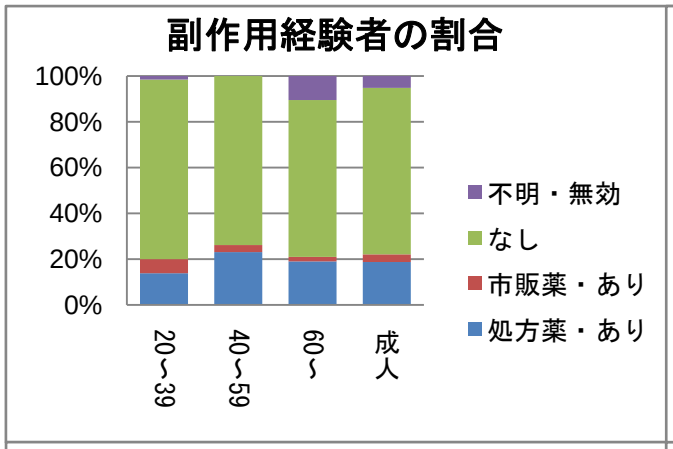


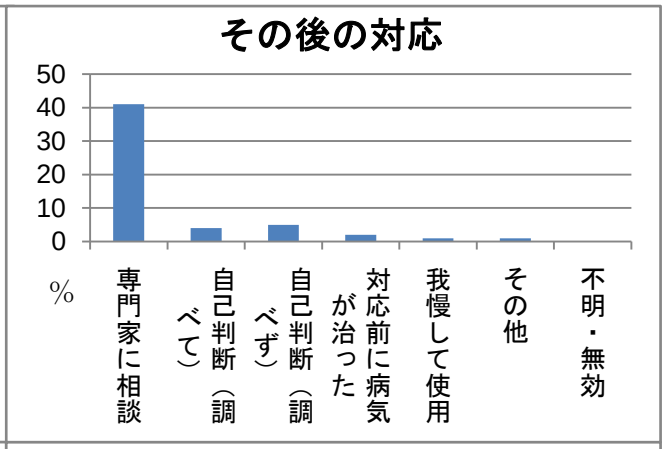


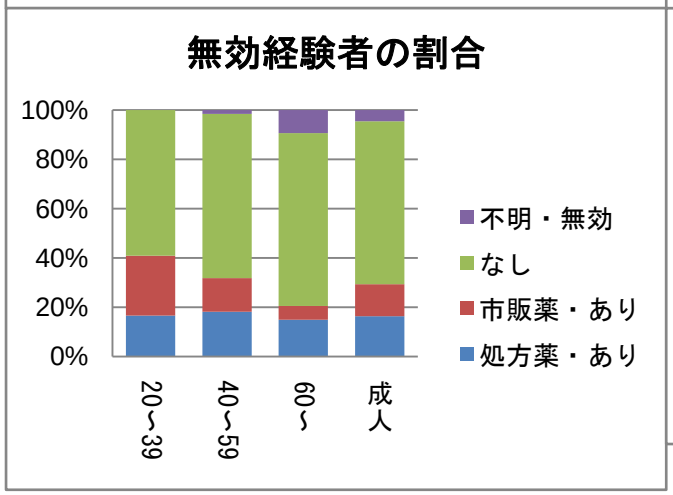


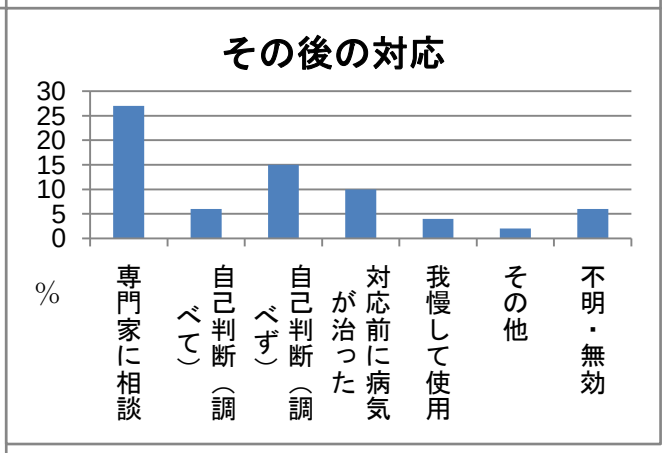


使用後のトラブル（設問４０～４３）：

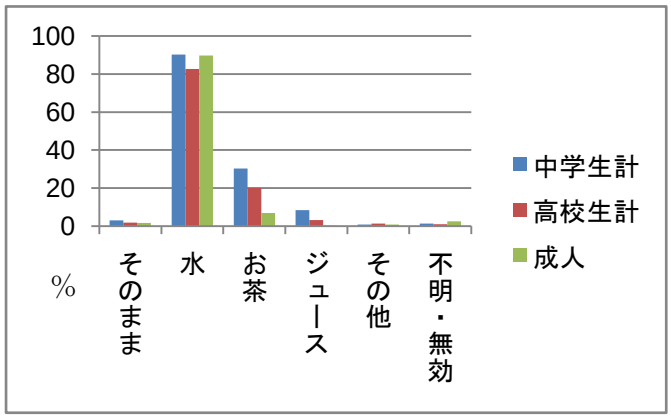




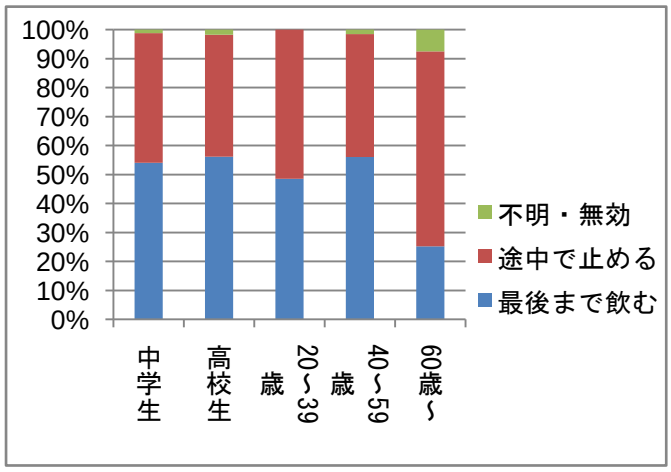




薬の飲み方（設問４４、４５）：



抗生物質の使い方（設問４６）：

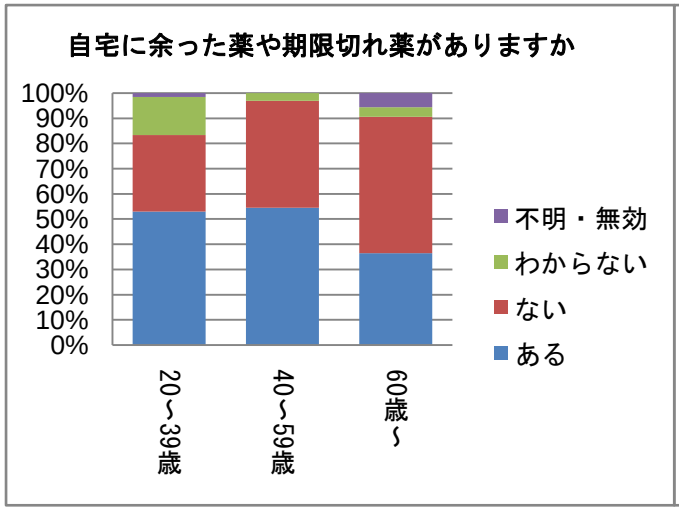


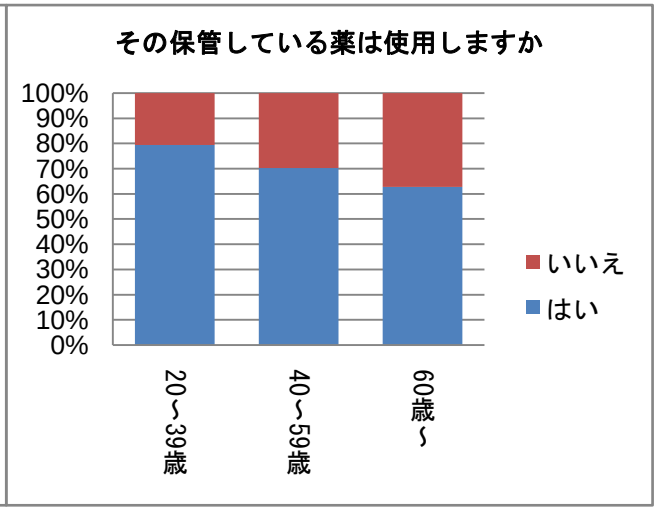
上：使用後のトラブルでは、副作用は処方薬で２割の方が経験があり、そのほとんどが専門家に相談して解決していました。一方で薬が効かなかったと答えた方は処方薬・市販薬ともあり、こちらも専門家に相談する方が多かったものの、それ以外の対応をする場合も見受けられました。市販薬では購入後の相談体制が確立していない可能性がうかがえます。

中：水（ぬるま湯含む）で飲む方が圧倒的に多く、お茶と合わせるとほとんどの方が該当し、適切な飲み方がなされていることがうかがえました。

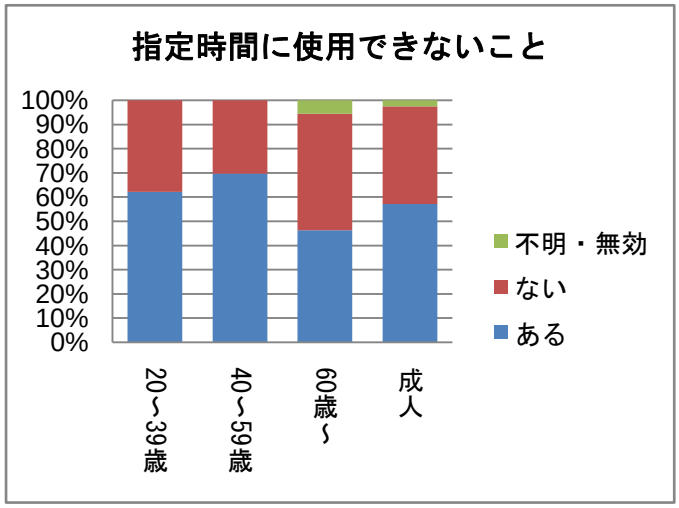
下：抗生物質は薬剤耐性菌の出現を抑えるため、症状が治まっても最後まで飲むことが推奨されています。結果では、途中で止める方と最後まで飲む方が半々程度で分かれました。また高齢者では途中で止める方の割合が高くなりました。

余った薬や期限切れ薬の保管状況とその使用（設問４７、４８）：





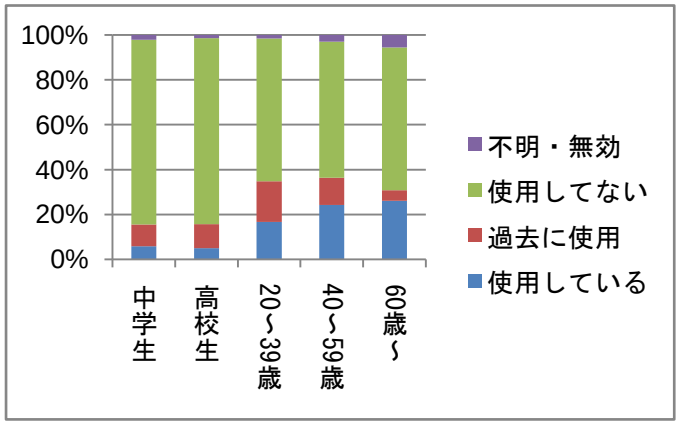
薬を使用できない場合（設問４９、５０）：



上：以前もらった薬の余りや期限切れ薬の保管状況は若い世代ほど多く５割近くにのぼりました。また、その薬と自己判断で使用すると答えた人の割合も６～８割となり、これも若い世代のほうが高い結果となりました。

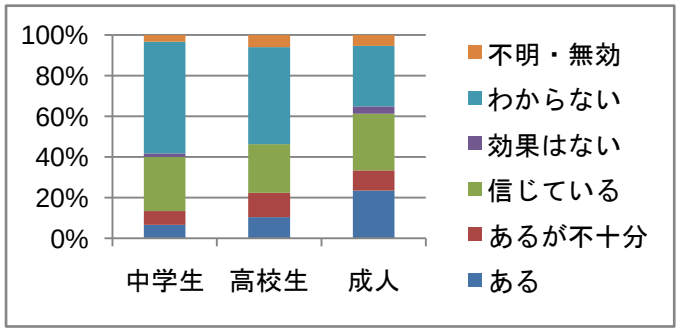
左：仕事を持つ若い世代で指定時間に使用できないことがある人の割合が高くなりました。また、平均でも約半数が指定時間に使用できなかった経験を持っていました。

健康食品の利用状況（設問５１）



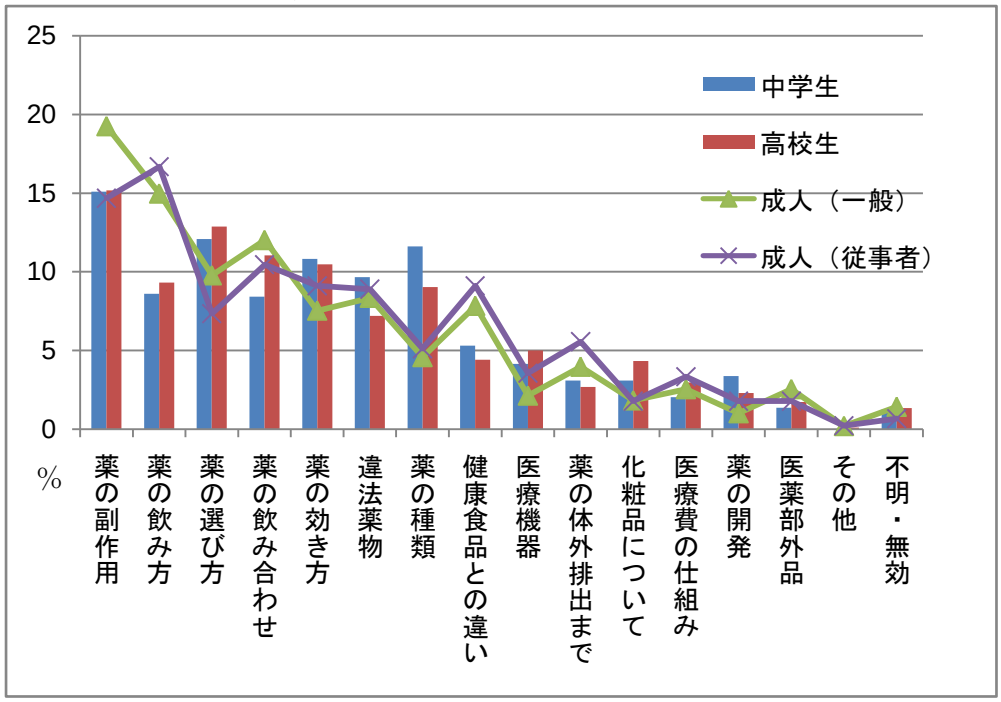
年齢が上がるほど健康食品の利用率は高くなる結果となりましたが、使用していないとの回答も６割以上を占めました。

健康食品への期待度（設問５２、５３）



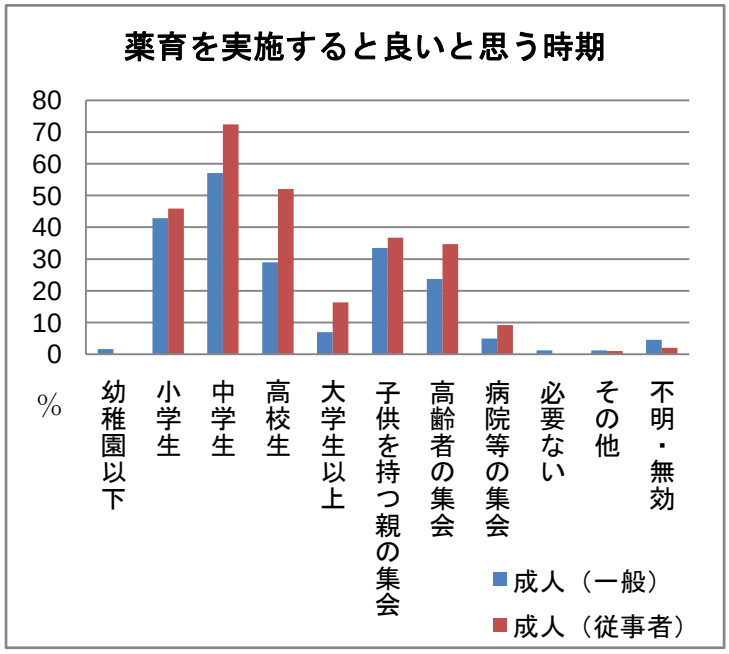
効果が実感できる人は成人でも２割台、中高生は１割以下でした。一方で効果はないと明確に答えた人はわずかで、信じている・分からないとの回答が６０～８０％程度と圧倒的に多くなりました。
健康食品は効果の実感がわきにくいため、標語や広告に左右されないよう適切な使い方の教育が一層求められます。

学校で教えたほうが良いと思う項目（設問５７）：



左から順に全体の合計人数が多い並びになってあります。
成人では薬の副作用・飲み方・飲み合わせの順に関心が高く、未成年では副作用・選び方・効き方の順となりました。
また化粧品については女子学生の関心が高いなどの性差も見られました

薬育を実施する時期（設問５８）：



中学生、小学生、高校生との回答が多かったものの、子供を持つ親の集会や高齢者の集会においても薬に関する教育をしたほうが良いとの回答が３割近くありました。
また、医療従事者のほうが一般成人より薬育実施時期に良いと考える適正年齢が高い結果となりました。